

---

# 愛しさのカチ

日々野 凜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛しさのカタチ

### 【Nコード】

N3524V

### 【作者名】

日々野 凜

### 【あらすじ】

高2のりりかは姉の頼みでハウスキーパーのバイトをすることに。雇い主は、イケメンだけど無愛想で変わり者の恋愛小説家！ さまざまな「恋」も動き出し、波乱の日々が始まるけれど……！？

## プロローグ（前書き）

久しぶりの連載の開始です。

だいぶ昔の原稿なので心配ですが……

最後まで楽しんでいただけますように

## プロローグ

「ちょっと、りりか!？」

HR終了と同時に教室を飛び出そうとした私は、親友の声に呼びとめられた。

「今日部活の日でしょ! どこ行くのよ?」

「あ〜ごめん、美森<sup>みもり</sup>。今日休むつ。遅れそうなの!」

顔の前で両手を合わせ見逃してもらおうとする。高校に入学した頃からの親友である美森がげげんそうに眉を寄せた。

「はあ? 遅れるってドコによ?」

「ほら、このあいだ話したでしょ。今日から例のバイトが始まるの」

そう、事の起こりは姉のあの言葉からだった。

「ねえ、りりか。あんたアルバイトしてみない?」

一週間ほど前の夜のこと。

二人で暮らすアパートに帰ってくるなり、姉の乃梨子<sup>のりこ</sup>が喜色満面で私の顔をのぞきこんできた。

「は? 急になに? お姉ちゃん」

「コレのいいバイトの話があるんだけど。ね、どう? やってみない?」

人差し指と親指で作ったお金のマークを目の前で振ってみせる。

お給料のいいバイト?

なんだか思いつきりあやしい。

お姉ちゃんがそういう話を持ち込んでくる時って、絶対に何か企てるんだよね。

「いつたい何のバイト? なんか……いかがわしいことじゃないで

しょうね」

読んでいた雑誌を置いてソファから立ち上がり、私はリビング続きのキッチンに向かった。お姉ちゃんが後からついてくる。

「あのねえ、大事な妹にいかがわしい話なんて持ってこないわよ。父さんたちが死んでから、あたしはあんたを娘のよーにかわいがってきたんだからっ。あ、今日の夕飯なーに？」

「オムライス。卵安売りしてたの」

1パック78円。学校の帰りに激安タイムセールで有名な近くのスーパーで買って来た。

本当は2パック欲しかったんだけど、もう残ってなくて。不覚にも主婦軍団に遅れをとってしまった、ダッシュしたんだけどなあ……。

「さすがりりか、やりくり上手」。料理もうまいし、しっかり者だし、いつでも嫁にやれる！ お姉ちゃん安心だわー。いつもほんつと、ありがとね〜」

猫撫で声でお姉ちゃんがほめてくる。

わざとらしいと呆れつつ、私はさっき作っておいたオムライスの皿をレンジに入れてあたためのボタンを押した。

仕事で帰りが遅いお姉ちゃんの代わりに夕飯や洗濯、もろもろの家事をするのは私の役目。

私たちの両親が揃って事故死したのは5年前、お姉ちゃんが20歳、私が12歳の時だった。それからお姉ちゃんは私を育てるため大学をやめて働き始め、私は家事を引き受けることにして。二人三脚でがんばってきたんだけど。

「……ねえ、なに？ 何か言いたいことがあるなら言ったら？」

「あ、バレた？ でも今言ったことは本当よ」。りりかは家事の天才！ そ・こ・で、そこでね！？ りりかにぴったりのバイトを見つけてきたわけよ。ハウスキーパーなんてどう？」

「ハウスキーパーって……家政婦？ だって私高校あるんだよ」

「ああ、大丈夫そのへんは。学校終わってからでいいの。ちよっと

寄って掃除と食事作りして帰ってくればいいだけ」

「ムリ。だってテニス部のマネージャーもあるし。これから夏の大会に向けて練習が増えるから忙しいんだよ」

「でもでも、週に二日くらいなら何とかなるでしょ!? 時給20

00円よ!? いい話だと思わない!？」

「ちょ、ちよつと待ってよ、お姉ちゃん!」

興奮状態でカウンターから身を乗り出してきたお姉ちゃんの前  
に思わず私は両手をかざした。

「何でそんなに私にバイトさせたいわけ?」

するとお姉ちゃんは急にしおれた花みたいに俯いて、

「……ごめんね、りりか」

深いため息をついた。

「本当はこんなこと言いたくないんだけど……最近ちよつと……き  
ついの」

「は?」

次の瞬間がしつと肩を掴まれ、私は驚いて目を見開いた。

「ここ何年か引越しが続いでるでしょお!? お金がないの!!」

学生の領分は勉強と青春だとわかってる! でもうちの会社も不  
況でボーナスカットだし、どうか協力して! ほんつとごめん、  
情けないお姉ちゃん! あ、でもね」

勢いよく頭を下げて謝ったかと思うと、お姉ちゃんは思い出した  
ようににこつと付け加えた。

「けっこうイイ男よ。ちよつとクセはあるけどまだ若いし、おまけ  
にリッチだし。だから頼んだわよ、わが妹っ!」

こうして不気味なほどの笑顔に押し切られ、私はバイトをする  
はめになったのだ……。



「ああ、そういえば言ってたね。お手伝いさんのバイト」思い出したらしい美森が小刻みに頷く。

「今日から行くんだ。それでいつたいどんな人なの？」

「うーん、なんか小説家だって言ってた。お姉ちゃんの知り合いの編集者の紹介なんだって」

お姉ちゃんは教育用教材の企画や制作販売を行う会社の営業をしている。その関係で知りあった人らしい。

「小説家あ？ うわ、なんか暗くてダサそう〜。もしかしてオッサン？」

「若い人だって言ってた。まだ大学生とか……。家と絶縁してて一人暮らしで、自己管理がうまく出来ないから様子を見てくれる人が欲しいんだって。けっこ売れっ子だって話だけど……。なんて名前だったけ」

昨日も聞いたんだけど……。スーパーのチラシのチェックに夢中だったから忘れちゃった。

「ふうん、でもなんでりりかなの？ プロのお手伝いさん雇えばいいのにな」

美森が首をかしげる。

「そうなんだよね。私もそう言っただけど、お姉ちゃんが譲らなくて……」。

「なーんか隠してるような気がする。でもうちは事情があって引越しが多くて費用がかかるのは事実。」

まあ卒業後の進路の資金のためにもバイトはしようと思っていたから、いいきつかけだったのかも。

「まあ、そういうわけだから、今日だけ部活休む！ 悪いけど部長にうまく言っておいて」

「しょうがないなあ。まあ頑張つてよ。でも万が一いい男だったら



あたしに紹介しなさいよっ」

美森にバシンと背中を叩かれて、私は思わずよろめいた。

「おっと」その時タイムングよく誰かが盾になってくれた。

「大丈夫？ 三澤ちゃん。美森はテニス部一の剛腕だから。骨折れてない？」

そんな冗談を飛ばしてきたのは、隣のクラスで同じテニス部の貴島里見くんだった。

「ちよつと里見！ 乙女に向かって失礼でしょ！」

美森がきつと里見くんを睨んだ。

「え、乙女どこ？ あ、三澤ちゃんのことかー。大丈夫？ ケガない？」

そんな美森をさらりとかわし、里見くんがにっこりと笑いかけてくる。今日も一段と爽やか。女の子たちから『王子』と騒がれるだけあるなあ。

「ちよつとー！ 無視すんなっ。あんたケンカ売ってんの！？」

耐えかねた美森が私たちの間に割って入って来た。

「おーこわ。相変わらず男前だねえ、美森ちゃん」

降参のポーズをとって里見くんは美森の攻撃をかわしていたが、

「あ、むっちゃん！」

大きなスポーツバッグを肩に担いでこっちに来る長身の男の子を見つめるなり、元気に両手を振った。

「……なにふざけてんだよ。さっさと行くぞ」

そんな里見くんを冷めた目で一瞥したのは、男子テニス部キャプテン、上杉睦くん。

『王子』と呼ばれる里見くんに対し、一見強面な上杉くんは『魔王』なんて呼ばれてる……。でもけっこう隠れファンが多いんだよね。

「ごめんごめん、美森がカツアゲしようとするからさー」

「だったらサイフごと渡しとけ。お前んち金持ちなんだから」

「ちよつと上杉？ あんたも殴られたい！？」

ははは。いつもの三人の構図に私は笑ってしまっ。すると頭一つ

分高い位置にある上杉くんの顔がくりつとこつちを見た。

「……あれ三澤、帰んの？」

その言葉に私は腕の時計にかじりついた。

「あーっ！ そうだった、こんなことしてる場合じゃないのっ！

！ ごめん皆、またね！」

大急ぎで全員を見回して、私は教室を飛び出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3524v/>

---

愛しさのカタチ

2011年8月1日03時21分発行